

「対人関係セミナー」公開講演会 [2011年3月13日]

## 転移の感知と理解、それから解釈へ

～ 対象関係論の視点から ～

松 木 邦 裕

京都大学大学院教育学研究科 教授

### はじめに

今日は、比治山大学の皆様にこのような機会を頂きまして、ありがたく感謝申し上げます。こうした機会に皆様と一緒にクライアントをどう理解するかを検討していけたらと思います。これからは、2時間弱ぐらいお話を聞いて頂くこととなりますので、あまり込み入った理論を持ち込むのも考えものかなと思いますので、できるだけ内容を広げすぎないように心掛けて、皆様に聞いて頂くとう思います。

今回は「対人関係セミナー」の第5回目ということで、私がこうしてお話の機会を頂いております。対人関係セミナーという名称を付けておられるのは、やはり広島心理世界の、臨床心理学のひとつの大きな考え方としての対人関係論という考え方が、皆さんに浸透しているということが、そのタイトルの表れであろうと思っております。

そこでこれから、その対人関係論とは些か異なる対象関係論というのがどういうものかを、まず私が皆さんにお伝えできればと考えております。精神分析の中にはご存じのように、いろいろな考え方がありまして、自我心理学、自己心理学、対人関係論、対象関係論、あるいはラカン派とか、そういうふうにもいろいろな考え方がありまして皆さんご存じだと思います。そうした中で対象関係論というのは、私が拠って立つているところは、正式には英国対象関係論といえます。英国で発展した対象関係論であります。

もともとの対象関係論というのは、ご存じのように、フロイトが『悲哀とメランコリー』という論文において、対象の内在化ということを書いておりますけれど、そこにとっても有名な言葉があります。「対象の影が自我の上におちる」という、そういう有名な言葉があります。そうした形での対象の内在化というのは、フロイトが言いましたけれども、それを英国で独自に

発展させていったのが、メラニー・クラインであり、フェアバーンであり、ウィニコットであります。

### 外的世界と内的対象世界

こうした歴史があるのですが、じゃあ対象関係論とはどういうものかということについて、少しお話いたします。先程、高橋学長がおっしゃったように、2日前に東北地方で巨大な地震と津波という壊滅的な状況が発生いたしました。皆さんもテレビでご覧になって、その地震津波で街が壊滅的な状況になっていたのを見ておられると思います。実際、そして私との面接に来られる方たちもこの震災に言及されました。

ある男性、この方は私と5、6年分析を続けている男性ですけれど、震災と前後してこの男性が精神分析のセッションを受けにやってきました。この男性は援助職についている男性です。そしてまずその男性が語ったのは、テレビで壊滅的な場面を見て、大きな衝撃を受け、テレビに釘付けになってしまったということでした。彼は自分の仕事はこういう時に役に立てないといへん無力を感じると語りました。

それから彼は、テレビでどこに目を奪われたかという、そういう津波とか火事で、もう全てが無くなってしまっている、全てが消えてしまって何もない状況が起こっているというその場面に彼は釘付けになってしまったと語りました。続けて彼は、家でテレビを見てそのあと外に出たら、外は何にも変わらない、変わっていない、今までと何にも変わっていない、日差しは明るいし、皆ふつうに生活していると。その身近な外側の状況が、何か自分の気持ちに受け入れられない感じがあったのだということを語りました。そこで私は彼に、「あなたの心の中で壊滅的な感覚が、今呼び起されてしまっているんでしょね」と伝えました。そうしたら彼は私のそういう解釈を肯定して、彼の心の

中にこそそういう壊滅的な感覚が起こっているのを認めた上で、全てが消えているという、全て何もないという、つまり全部失われてしまったということが、自分にとってもの凄い強烈な感覚のものなんだということ私に答えました。

実は、もう5、6年も分析を続けておりますから、彼にとって大変深刻な問題は、喪失の問題、喪失に耐えられないというのが彼自身の大変深刻な問題であるとしてずっと話題になっていたものでした。そしてそれはどんな喪失かという、幼い頃からの体験としての、母親を失ってしまう、母親が全くいなくなるということの恐れであり、それが起こったことへの反応であるということに話が進んでいったのです。

今、私がお話した流れをお聞きになってお分かりのように、東北地方で起こっていることは実際の現実の状況なわけです。外的な出来事です。しかしそれが内的な出来事として、本人の世界の中での壊滅的な感覚、そして壊滅的な感覚をもたらす、内なるお母さんとの関係が浮かび上がっています。そこを、そのまま見ていく作業が対象関係という、心の内側のその対象、今のお話で言えばお母さんですけど、そうした関係を見ていくという作業としてなされることとなります。

もうひとつ、お話しします。別のクライアントとセッションをその日持ちましたが、この女性は、私と2年程の分析の関係がある方なんですけど、この女性もやはり東北の地震のことに触れました。ツイッターで「今自分はここにいるから救助に来てくれ」とかそういう情報が回ったり、いろいろしているんですね。そこから彼女は、自分が今安全なところにいるんだけど、その自分が非常に申し訳ないという罪悪感を語っていきました。そうした思いを彼女が語っていくのを聞いた上で、私は彼女に「おそらくあなたの心の中に、あなたがかつて体験した壊滅的な体験が今蘇っていて、その時の感覚を今あなたは私に伝えておられるんでしょね。」と介入していきました。解釈をしていきました。その人は幼い時に、お父さんが突然亡くなられてしまわれたんです。事故で亡くなられたという体験があった方なんです。その体験に私は間接的に言及したわけです。そうしたところ、彼女はそれから想起していきました。

突然、父親が亡くなった時の体験、あるいはその後の体験があった時に、母親は彼女の妹の方にさまざまな負荷を与えて、彼女自身はどちらかといえば大事にされた、そういう関係が発生したのです。そのことを

彼女は想起し、それが現在も続いていると言います。妹の方は、母親からいろんなことを持ちこまれたり頼りにされたりして、妹の方は大事にされない扱いを、自分の方は凄く大事にされすぎているので、そこに罪悪感を感じると語っていきました。

このように、彼女は外的な出来事として東北の震災を目の当たりにして、自分が安全なところにいることへの罪悪感を語ったのですが、それは内的な感覚にもともとあったものなんですね。この人の内側には、やっぱりずっと幼い頃から何か自分が安全なところに置かれていて、大事にされていて、困ったことにならないように母親がいつもやってくれていた、そのことは有難いんだけども凄く罪悪感を、重さを感じる部分があるのだという、そういう話として私たちは見ていく作業をしたのです。こんなふうに、心の内側の世界、心の中の世界といっても良いんですけど、専門的な言葉を使えば、『内的対象世界』という言葉になってしまいますけども、心の中で、自分という自己あるいはセルフ/selfといったものですが、そうした自分と、その重要な他者である内的対象との交流という、それがその人の心の在り方の本質、あるいは心の在り方の葛藤を形づくっているのだという考え方が、対象関係という考え方なんです。

精神分析的な考え方ですから、自分の心の内側の対象関係はもともと無意識であり、そういうものとは意識されていなくても、体験されているということがここにある考え方です。

別の表現をしますと、私がここで話をしておりますし、皆さんが私の話を聞いて下さっているのですが、私に対する皆さんの見方捉え方というのは、皆さんそれぞれで違っていると思うんです。話としては同じ話を聞いておられましようけど、それぞれ皆さんは私に対して、私がこういう人間じゃないか、こういう人間でこういう話をしているんじゃないかと思われるんだと思うんですね。それが、皆さんが心にすでに持っておられる、ある対象像を私に投影して、その人物が話しているという感覚で聞いておられるという理解ができるということなんです。ですから、皆さんの中で私のことをどちらかといえば、ポジティブに捉えておられる方は、この人間が話しているんだからしっかり聞こうかなと思われるかもしれませんが、そうではないネガティブな内的な対象を投影されている方は、なんかつまらない話をしている人物として私が見えたりするわけですね。それは私が同じ話をしても、皆

さんの中のどういう対象が私に、現実の外の私に投影されるかで違ってしまおうということなんです。

言いかえれば、私たちは外の世界をきちんと現実的に見ているつもりでも、実際にはそうではなくて、私たちの内的世界を通して外を見ているということなんです。つまり、ある種の色眼鏡で外を見ているのだと言えるのです。その色眼鏡というものの質が、内的対象世界、内的対象関係だと言えるわけです。

それは表現を変えますと、私たちの無意識というのは、超自我、自我、エスという構造論的な発想からいきますと、私たちの心の奥といえますか、心の下の方にあるような感じを抱きやすいんですが、そうではなくて、無意識というのは私たちの外にあるのだということなんです。私たちの外にあって、それが現実的なあり様だという感覚で、生活している、そこに実は無意識の感覚が入り込んでいるのだということなんです。

#### クライアント理解に欠かせない転移概念

これが、これからお話しします、転移というものに繋がってくることになります。対象関係という考え方から、転移を見ていくことをこれからお話していきたいと思えます。

今日のお話では、聞いていただく主題は転移ということですが、転移というものには、逆転移というものが当然関係してくることになります。逆転移というのはセラピスト側の転移というものですから、当然転移とは無関係ではないわけですね。

さて、まずその転移という概念、転移という言葉になぜこだわるのかと言いますと、何よりこの転移というものがそのクライアントを理解する時の、非常に有効な手立てになるからです。クライアントを理解する時に極めて役に立つというものです。

私自身が、転移というものをどういうふうにして体験したかということについてお話をします。私はもともと大学を出る前後に、精神分析を学びたいと思ってフロイトを読み始めました。フロイトのいろんな論文を読み始めた時に、読んでいてもひとつ実感が湧かないのが転移だったんです。フロイトを読んでいると、転移を理解するのが大事だと書いてあるんですけど、読んでいてもなかなか分からなかったんです。働き始めて、臨床実践をすることになってきましたけれど、それでもなかなか分からなかったんです。臨床を始めて4年目の時だったと思います、福岡大学に臨床の場を移してから1年目の時だったと思いますが、18歳の

男性、高校を卒業して働き始めた男性が悩みを抱えて治療を求めてきたわけです。この男性は何に苦しんでいたかと言うと、自分がインポテンツではないかと不安に思い、非常に苦しんでいました。自分がインポテンツではないかと恐れていて、インポテンツではないと確かめるためにマスターベーションをするわけです。マスターベーションをすると、その後また勃起しなくなるような恐れが迫ってきて、不安がまた高まる。そこでまた、勃起できることを確かめるためにマスターベーションをします。そういう強迫的な恐れが続いたのでした。もう自分では対応できないという感じがあって、私の働いているところに来て、私が本人と面接することになったわけです。

週1回対面法の面接を行っていました。彼はいろんなことを語ってくれたんですけども、だんだん、彼がどういう状況にあったかということが私にも分かってきました。

彼の家は、お父さん、お母さん、そして彼は男三人兄弟の真ん中だったんです。お父さんという人は、司法試験の浪人という状態をずっと続けている人でした。実際にはあまり勉強もしないで仕事もしない、女遊び、競輪とか競馬に行ったりする、そういう遊び人の生活をしておられた方みたいだったんですね。それでお母さんが生活を支えていて、もう随分前ですから土方をしたりして生活を支えていたんですね。そして、子どもたちが高校生ぐらいになった時に彼ら三人は父親の実態に気がついて、父親を家から追い出したんです。彼のお兄さんと弟は父親を追い出して清々したと言っていたらしいんですけど、その時に彼には、何か引っかかるものがあったと、どこか何か父親に対して悪い気がしていたと想起していました。

彼は、高校で非常に優秀な成績を修めていたので大学に行きたかったんですけど、お母さんが経済的に苦しいから就職してくれと頼んできたので就職したんです、大学を断念して。そうした中で起こってきた出来事だったんです。10セッションくらいした時にはインポテンツの心配はもうほとんど問題じゃ無くなってきまして、つまり最初訴えたことは全然問題じゃなくなってきたわけです。そして20~30セッションくらいの頃に、私に向かって、「本当は、自分は大学に行きたかったんだ。今でも行きたいんだ。」とかそういう話をするようになったわけですね。

そして、30セッションくらいになった時に彼は私に対して、「自分は仕事を辞めて大学で勉強したいから、

仕事を辞めていいか許可を出してくれ」って私に言い始めたのです。まあ、その当時私は経験がなかったものですから、そもそも治療をやっていたはずなんですけど、そういう仕事を辞めていいか、いけないかという判断を迫られると、私は不可解な立場に置かれているということに気が付かざるを得なくなっただけですね。

彼は来る度に「仕事を辞めていいでしょうか」と私に訊きます。そのような状況で私は「これは一体何なんだ」と思っても、まるで分からなかったのです。そしてそう…何て言うんでしょうね、大臣の答弁のように、曖昧なあまり意味不明なことを適当に答えていくしかなくて、そういうことを繰り返していたところ、ある時に彼がやってきて、「先生、私は決心しました。今の仕事は辞めます。」とはっきりと宣言しました。「今の仕事は辞めて勉強します。」と言いまして、そして「もう、そうすることにしたから、悩みはなくなりましたから、これで治療を終わりたいと思います。」と言って、終わったんですね。

治療そのものが終わったんです。まあ、その表面だけ見れば、良くなって終わったということになるんですけども、その時そこで何が起こっていたのかということが、そのすぐの時点で分かりませんでした。その後振り返ってみた時に、要するに私は、進学を諦めて仕事をしようということと言っていた母親だったのです。私は母親を表していたわけですから。だから母親としての私に、仕事を辞める許可を得ようとする態度をとっていたのです。それで彼の症状が象徴的に表しているのは、彼はいわゆる勃起の出来る男性、つまり父親、いわゆる男性として自分をはっきり持ちたいという気持ちがあったわけですから。それが、ペニスが勃起することに象徴されていました。

ところがそれをすることは、母親を苦しめる、母親を悲しませることになるわけですね。なぜなら父親は、女遊びはしても、働きもせず母親を苦しめていたからです。だから彼がポテンツのある父親に同一化しようとする、母親を傷つけることになります。その恐怖が、その葛藤が、勃起するペニスとインポテンツの恐怖として表れていて、そこに象徴化されていたものが、私との間である種、転移的に再現され、劇的に起こったというように理解できました。こんなふうに転移というものは起きてくるのだ、と私は実感し始めるようになりました。そうして見ていきますと、もっといろいろな転移的なあり方というものが見えてくるようになっていきました。

ちょっと概念的な話に戻りますと、フロイトはここに書いておられますように、転移について、その分析の圧力によって引き起こされた意識にもたらされる興奮や空想の審級と複写だというふうなことを言っております。おそらく転移の定義で、一般的で一番分かりやすいのはグリーンソンの定義だと思います。このグリーンソンは、マリリン・モンローの分析をやっていた人です。グリーンソンが言っている転移とは、目の前にある人物に、無意識に置き換えられた早期小児期の重要な人物にまつわって生じている反応の反復である。転移は対象関係、対象との過去の関係の反復、置き換えの機制、退行であると言っています。これがオーソドックスに分かりやすい、転移の考え方だと思います。

転移の定義をもう少し対象関係論的に言いますと、さっき私がいくらか説明したように、クライアントの内的な対象世界、それを無意識的空想と言うんですけど、それが外界に投影されているというものです。つまりその投影される時に、投影の受け皿と言いますか、それを受け取る人物に、セラピストがなるということになります。こうしたふうにその本人は意識していないわけですけど、その人が心の中に抱いているある人物像、ある人間像、ある対象像がセラピストに対していつの間にか持ち込まれる、転移されるということが実際にセッションを繰り返していると必ず起こってくることなんです。

### 事前になる転移現象

実は、ここに書いていますように、『preformed-transference』というものは会う前から起こっているんですね。例えば皆さんのところに、あるクライアントがやってきたとしたら、そのクライアントは自分の中でそれなりに、セラピストのイメージというものを作ってやって来ているんだと思うんです。本当に全く何にも考えないでやって来ましたという人はまずもっていないんです。その人なりに、どういうセラピストと出会うかというイメージを持って、セラピストに会うと思うんです。それというのは、まさにある種の内対象が、もうすでにセラピストに事前に転移されているという状況が起っているのです。だから初回にやって来たクライアントの反応というのは、明らかにそういう『preformed-transference』、つまり事前にそのクライアントが抱いていた人物像とセラピストが近いか遠いかという感覚をその場ではっきり出してく

るのです。

例えば20代の女性が自分のお母さんのような年齢のセラピストをイメージしていたときに、そこに実際に対応したのが若い女性だったときには、明らかに困惑か失望を表します。それは、そのクライアントが自分の思う母親的な人物に世話されたいとか、母親的な人物に話を聞いてもらいたいといった内的対象とのかかわりを思い描いているからです。ところが実際のセラピストがそうではなかったということで、ある種の幻滅が起こるわけです。そこで陰性の転移、つまりその否定的な受け取り方が起こってきたりするわけです。

例えば、その面接をしたセラピストが若い女性だったときに、クライアントは面接者に対して、自分のお姉さんだったり、妹だったり転移して競争相手だとみてしまうかもしれません。だから転移というのは事前にも起こるし、その場その場で起こってくるものでもあります。これは、また後から実際の例を挙げてお話ししますが、クライアントが語るあらゆる連想、つまりあらゆる話の中に転移は含まれているのだということです。ここの理解が非常に大事になって来ます。それから、転移は単に言葉だけではなくて、振る舞いによっても表わされている、あるいは表情にも表わされているということがあるんですね。

同じように、セラピストの振る舞いや表情によっても、こうした転移が刺激されることがあります。もう随分前になりますけど、私が病院で働いていた時に、中年の女性で不安と鬱が高じてしまい、混乱して、自傷したり、もうろう状態に陥ったりする女性の面接を行ったことがあります。

その女性がセッションを始めて数回しか経たないうちに、私に対して強い恋愛感情を向けてきたんです。それであまりに早くそういう転移が発生するので、一体何が起きているんだと思っていましたところ、彼女が説明してくれました。その時私は病院で働いたので、白衣を着ていたんです。そして彼女が精神的な混乱を起こすことになったそのきっかけというのは、ある男性との不倫関係の始まりだったんですね。それが混乱のきっかけだったんです。その男性はケーキ職人だったので、白衣を着ているんです。だからそこに、白衣を着ていた私というのがまさに転移の対象になったのです。そこで、恋愛感情が急に高まるということが起こっていったのでした。

## 転移に絡め取られる

それから、転移というのは断片的な、部分的なかたちで出てきますが、だんだん濃厚になっていきます。そして濃厚になってきますと、セラピストはその転移に絡め取られたようになっていくのです。

皆さんが、あるクライアントと、これまで皆さんのご経験の中である人との人間関係で物凄く窮屈になってそこから動けなくなるというのか、窮屈になってなんかもう自分らしく振る舞えなくなったり、あるいはもうその関係に入ってしまうと特定の感情になってしまったりするという経験もおありなんじゃないかと思うんですが、それはまさにそういう転移に絡め取られている状態なんですね。そうした状態にある時こそが、まさに私たちがクライアントの内的対象世界のある対象像に位置づけられていて、そこに押し込められている、身動きが出来なくなっている状態です。だから、私たちの治療、セラピーが行き詰っているという感覚が起こっている時には、たいていの場合私たち自身がつかめてない転移状況が起こっていて、それに対して私たち自身がつかめてない逆転移の感覚が動いていて、こうして行き詰ったような体験が起こってきているのです。

そういう状況になると、私たちも苦しいんですけど、クライアントも苦しいのですから、クライアントがよく行うことは、セッションの間を広げることです。例えば、毎週会っていたのを、隔週にするとか、月一回にするとかして、その転移的な窮屈さから逃れようとする場合があります。あるいは、さっき私がお話したケースのように、「もう随分良くなったから、終わりたいと思います。」とって終わるといような、こんなことも起こりやすいものです。

そして、私たちが何故転移に関わる必要があるのかということ、繰り返されるからなんです。その人の人生において、その関係性は修正されないで繰り返されるのです。例えば、皆さんケースの中でいろいろおありだと思っんですけど、必ずその職場や人間関係で衝突して関係を壊してしまう方がおられることはご存じだと思いますし、あるいは相手に一所懸命気に入られるように頑張り続けて、でも頑張れなくなってダウンしてその関係を切ってしまうとか、そういう関係の持ち方を人生で繰り返すことが起こっている人たちがいます。それは、自分の内的対象関係を本人が自覚しないままに、ただ人生の中で行動として繰り返してしまっているのです。ですからそれを修正するには、そ

う関係の持ち方がセラピーの中で起こっているということを見つめていかないといけませんし、理解しないといけません。ですから、転移を私たちの面接の中で扱うということがたいへん大事なことになるわけです。ここに書いておりますけど、転移というのはここに列挙している性質を持っています。この辺については皆さんにお配りしている資料に書いていますので、また見て頂ければよろしいかと思えます。

## 逆転移とは

ところで、逆転移というものがああります。

逆転移というのは私たち治療者の中で起こっている転移ということですね。もともとこれは『counter-transference』という言葉なので、本来的に対抗転移という訳語の方が適切なはずなんですけども、使いやすいうことで、逆転移という言葉が使われております。要するに、私たちの中に起こるある種の神経症的な無意識的葛藤がクライアントとの間に持ち込まれるというわけです。

この逆転移については、最初は転移についてもそうだったんですけど、治療の妨げになるものとフロイトは考えていました。しかし、その逆転移について、1950年代から新しい考え方が出てきました。

ここに書いていますように、ポーラ・ハイマンとか、ピオンとかロジャー・モネー・カイルといった人たちが言い出したことなんですけど、逆転移という私たちの中で起こるいろんな思いや考えや感情というものは、実はクライアントとのやり取りの中で生じているものであるということにおいては、ある種クライアントの感情や思考や空想が、むしろ私たちの中において体験されたり理解されたりするものだという考えが持ち出され始めました。この考え方から、逆転移を、むしろ転移を理解するために使うという新しい視点のもとに使うことになりました。

ここに逆転移の今日的な定義を書いております。ポーラ・ハイマンという人がここに書いていますように、患者に対する治療者の感情や態度全般というような、要するにセッションの中でクライアントといるときにセラピストの中に湧き上がってくるいろんな感情や考えとかそういうものすべてを逆転移と言いだしたわけです。こうした広い定義が今日的な考え方になって来ました。

## 逆転移の種類

この視点からみますと、逆転移というのは大まかに3種類あるんです。

1番目は、治療者の逆転移の本来の定義であります、治療者の病的な反応です。治療者のある種の転移、治療者の内的世界のあり方をそのまま持ち込んでしまうというものがひとつあります。

それから2つ目は、クライアントがセラピストに投影するものがあるわけです。これは例えば、ある種のボーダーライン的なクライアントと会っていると、私たちに対して激しい怒りや憎しみを向けてきて、私たちを非常に脱価値化する攻撃を向けてくることがあるということはみなさんも経験的にご存じだと思います。そうした時に私たちはクライアントから責められて、すごく惨めな気持ちになったりするのです。惨めな気持ちや無力感を味わったりするものなんですけど、他方、クライアントは脱価値化するような非難を浴びせて意気揚々と帰って行くようなそういうセッションがあったりします。こうした時というのは、実は私たちが体験している以上に惨めな無力感をもともとクライアント自身が体験していたものであって、それをクライアントが私たちに排泄してクライアント自身は勝利感の方だけを意識して自分を安定させようとしていると理解することができるのです。こうした時には私たちの中にある無力な感じというのは、実はそのクライアントの中の感情が私たちの中に置かれて、本人には隠べいされているとの理解ができるのです。投影物なわけですね。これが2つ目です。

そして、3つ目にあるのは、クライアントが投影したものに對する私たちの反応というか、投影の反響が逆転移の反応として起こる事態です。たとえば、そこですごい無力感を感じさせられることに対して、たいへんな憎しみの感情が起こってくることです。あるいはその、無力感あるいは惨めな感情にもう呑み込まれてしまって、さらにもっと絶望感のような感情を私たちが感じてしまうことが起こるかもしれません。

クライアントからの投影物への3種類の反応が逆転移として生じてきますが、それを仕分けすることが、セラピストとして私たちが機能する時に、非常に大事なことになってくるのです。こうした考え方から起こってきているのは、ここに書いてありますように、その人の転移をもう転移だけと考えたり逆転移というものを逆転移だけと考えたりするのではなく、これらをひとつのユニットとして考えるという考え方が今日的

なものです。

これは対象関係論から言いますと、内的な世界というのは自己と対象のやりとりというもので成り立っているのですが、それが内的な世界、その人の在り様を築いているわけですから、それがそのまま現実のセッション場面で展開される、すなわちクライアントの転移とセラピストの逆転移という2人の関係のインタラクションとして実際にはそのまま展開するのだと、経験的にいえることになるんですね。この時に実際に起こるのは、例えば単純に考えれば、クライアントがある種のセルフ、自己の部分になっていて、セラピストがその内的対象を投影されているということが考えやすいものです。けれども、人間の心はそんな単純なものじゃなくて、逆転移することがあるんです。クライアントの方が内的対象の何かの役割を担っていてセラピストがクライアントのセルフの部分になったりするということが起こったりするのです。先ほどお話しましたボーダーライン的なクライアントが激しい攻撃をこちらに向けてきた時に私たちが惨めで無力な感じを感じるとしたら、それはクライアントの子どものセルフの体験であるのかもしれないですね。子どものセルフの無力感の体験を私たちががして、クライアント自身はむしろそういう子どものセルフに対して極めて支配的で攻撃的であった母親的な対象となって、自分自身が攻撃対象の側になって自分を安定させようとしていたってということかもしれないのです。

いずれにしてもこういう転移と逆転移、つまりクライアントがこちらに投影してくるものとセラピストの中でうごめくものが連動しているという考え方が、いろんな学派を越えて精神分析において今日的な考え方になっています。しかし話を進めすぎずに、ここで話を実際的な話しに戻したいと思います。

## 転移・逆転移の関係

それでは、どんなふうに転移と逆転移の展開を進めたいのでしょうか。そこで、どう転移を感知できるかっていうことにつきまして、皆さんにお話を少し聞いていただこうと思います。

精神分析をご存じの方は皆さん知っておられると思うんですけど、私たちがクライアントの話をどんなふうに聴くかということ、フロイトが言っていた「平等に漂う注意」という聴き方がありますよね。日本語でその「平等に漂う注意」と訳されている治療者の在り方があります。ドイツ語で「Gleichschwebende

Aufmerksamkeit」という言葉でいわれておりますけど、英語では「evenly suspended attention」あるいは「free floating attention」という表現でいわれているものです。要するに、こちらが最初から意図を持って聴かないということなんです。最初から焦点づけした聴き方をしないということです。じゃあどんな聴き方をするのかというと、とにかくクライアントの話すことを細かく評価しないで、じっと耳を傾けてそのまま聴いておくということになるんですけど、そうした聞き方というものがある転移を感知するための基本的な姿勢です。ひとつの喩えをしますと、クライアントに耳を傾けていると、現実の話としてはわかるとしても無意識の中の何が語られているかというのは私たちにはわからないことがよくあります。つまりそこは暗闇なわけですけど、それを「平等に漂う注意」で聴くというのは、その暗闇の中にサーチライトを自由に動かして照らしているみたいなイメージではないかと思えます。そのサーチライトが何かを見つけることがひとつの大きなきっかけになるのです。それはその方法によって、その時にクライアントが持っている不安、恐れ、あるいはどんな感情を見つけだせるかというのが、まず転移を感知するための大きな取っかかりになることなんです。

## 内的世界の不安

ひとつ例を示そうと思います。クライアントの内的世界にどういう不安があるかということについてです。私がスーパービジョンしているケースで語られているものを例にしてお話をします。このクライアントはもう6・7年治療を受けている女性なんですけど、30前後の女性で、セラピストも女性です。

セラピストがあるセッションで、最初に来週の時間の変更願いをクライアントに伝えます。だいたい14時からやっているクライアントらしいんですけど、それを「13時からに変更していただきたいんですけど、どうでしょうか」ってことをセラピストがクライアントに伝えます。セッションの一番初めに言われてクライアントは少しだけ驚いた表情を示しますが、「はい、大丈夫です」って即答するんです。それから少し沈黙した後こんな話をするんです。「母に予定を伝えても、母は予定を守ってくれない。それで腹が立つんだけど、私は母親にガミガミ言いつづる」。「母は私が予定変更に弱いのはわかっていると思うけど、だから、私の望むようにしてほしいと思うから苦しくなってし

まう」とクライアントが語りました。今の文脈の中で、皆さんお聞きになっておわかりだと思うんですけど、最初にセラピストが予定の変更を伝えました。するとクライアントはそれに対して「大丈夫です」という返事をしたのです。その後、沈黙の後、母親の話をします。そして何を言い出したかという、母親に予定を伝えても守ってくれないということを言っていますね。彼女は意識的には母親の話をしていますけど、これは明らかにセラピストの話ですね。セラピストは予定変更を伝えているわけですから、変更を申し出ているセラピストが守ってくれない。もともとそのセラピーはずっと14時からやっていたのですから、それをセラピストが変えたわけですから守ってくれないと、ここでクライアントはセラピストを批判しているわけですね。それから彼女はさらに「私が予定変更弱いのをわかっている」と思うということを言っています。つまり彼女はセラピストが予定変更をもちこんだことに非常に動揺しているのです。「弱いのはわかっているのに」という不安がここに現れています。だからこの不安こそが、今クライアントが抱えている不安なんだと私たちが理解できることになるわけです。

それから彼女は「私の望むようにしてほしいと思うから苦しくなる」ということを言っています。つまり今自分はセラピストが変更をしたために非常に苦しくなっているということを言っているわけですね。実はこの話が展開していく中で、そのあと沈黙があるんですけど、沈黙してこの女性は何かひっかかるといって頭をおさえこみます。そして、また少し沈黙した後、守って欲しい、安全でいたい、関わりたいというふうなことをとぎれとぎれにつぶやくように言います。つまり彼女には、セラピストが時間変更したことによって、母親であるセラピストが自分を守らなくて安全を奪ってしまったという感覚をセラピストに伝えているんですね。だからここに母親が転移されていて、その母親との間で安全感が今奪われたという、まさにクライアントのこの性質の恐れを伝えていると聞けるんです。どういう不安が動いているかを感知して、その文脈を読みとる作業です。文脈／コンテキストです。それが、こうしたクライアントの転移を理解するという作業を進めるのです。

この臨床例について少しお話しますと、この女性には妹がいるんですけども、妹が非常に手のかかる妹でした。妹が生まれて、彼女は、お母さんが妹にいっぱい手をとられたために、あまりちゃんと世話されなかった、

守られなかったと、そういう感覚をもっている人なんです。さらに決定的なことがあったのは、この女性が小学校に入る前にある慢性疾患にかかってその病気のために一年くらい入院したんです。幼い子がひとりで入院することになったのです。お母さんは妹の世話とかあるものですからあまり病院に来てくれなかったという生活史をもっている人なんです。ですから、彼女が語っている「守ってほしい、安全でいたい」感覚というのは、ずっと彼女が抱えていた気持ちの問題であったわけなんです。それが、セラピストが時間の変更を申し出るといって刺激をもちこんだことから非常にビッドに転移反応としてこういう話題が出てくるっていう、そんな流れがここに認められます。

### 不安の根っこを理解する

こうしたわけでまず、私たちは、今自分とやりとりしているこの人は何が不安なのか、何を恐れているのか、あるいはどういう感情が大きなものになっているのかをつかむことが最初のポイントになります。それからその次に、その不安が置かれている文脈を読むということです。コンテキストを掴むという、これが次の大事な作業になってくることになります。今の例でお話しましたように、クライアントはセラピストについては直接言及しません。お母さんのこととして話しています。お母さんのこととして話しているんだけど、まさにそれは今セラピストとの間に起こっていることそのものですね。それがこうした形で表現されるのです。

少し今のケースの話が続けます。この女性が守ってほしい、安全でいたいと言いました。それからまた沈黙して、関わりたいという思いも浮かんだというわけです。ここでセラピストは初めて介入します。「関わりたいっていうのは、どんなことですか」と聴きます。そしたらクライアントは少し沈黙した後「関わってほしいというか、放っておかれない」ということをいいます。またそこで沈黙します。そこでセラピストが次のような解釈をするんです。「今日、来週の時間変更を私がお伝えしましたね。そのことで私がおあなたを守っていない、放りだすように感じられておられるようですね。」こういう解釈をしたわけです。だからここでこのセラピストは、クライアントがお母さんのこととして語っているんだけど、今の自分との関係を語っているのだという認識ができていて、それに基づいた解釈をしているんです。そうするとクライアントは次のような応答をします。「えー、うーん」



と言って首を傾げてしばらく沈黙します。それから「先生は母とはまた違うというか、今違うところを細かく探しているような」っていうことを言います。

ここで何か起こっているのかというと、このクライアントはセラピストが自分を世話しない母親だということを認識するのが不安すぎるものですから、セラピストをなんとかいい人においておこうと思って、本人が言っているように「先生と母親は違うというか、今、違うところを細かく探している」と言っています。セラピストは実際の母親と正反対の理想化された母親だ、そういう正反対の対象とみなしたいのです。つまり彼女をちゃんと世話している対象であると、無理やりセラピストはしっかりと守ってくれていると考えたいわけです。ですからここにひとつのconstellation／布置が浮かんできますね。関係性の有り様が浮かんでくることになります。つまりクライアントにとってはクライアントを見捨てる、守らなくて安全でないようにしてしまう、放りだしてしまう非常に悪いお母さん対象と、そうではなくて非常によく関わってくれて理想的に関わってくれる、いいお母さん対象というコンステレーション（布置）を持っていることが浮かび上がってくるのです。ここのところに、彼女がなんとかセラピストを理想化された対象にしようと格闘している様子がうかがえます。語っていることの文脈をつかみ、それからコンステレーションをつかむ。この対象とセルフの布置というものをつかむという作業をすることが、どういう転移が起こっているのかっていうことをみていく時に、その次の大きなステップになるのです。

### 対象関係のストーリーを読む

心の底にある不安、それから文脈、そして布置をつかむという作業がなされると、その人の持っている対象関係のストーリー、その人の物語を読みとる作業に入っていくことになります。このように私たちは、意識しないで自分の持っている内的な無意識のストーリーを外界でそのまま演じているというか生活しているという側面があるのです。

少し別の例を示してみたいと思います。これは実際、私がつけていたセッションの中の一例です。このセッションは朝の7時から始めているセッションです。私とのセッションが終わってクライアントは仕事に行きます。そういうセッションですね。私とセッションを始めて1年少しぐらいの時、次のような話をしました。「今朝とても寒かったので、このあいだまで暖かかっ

たんで、もうはかないかと思ってクリーニングに出したばかりの一番生地の厚いズボンを寒いからはこうかなと思った。それでそのズボンを出して、そのズボンをはいていいかと妻に尋ねたら、妻がひどく困った顔をした。それで、これはああダメだと思って、じゃあそれはもういいとそれ以上その話題に触れないようにして、自分は別のズボンをはいてここに来ました」という話をしました。その時に妻は「あなたがはかなかったら、はかないのが私のせいになるのが嫌だからはいて」と言ったと、「しかし、そうしなかった」と言います。そして、やっぱりこんなふうにはかならないのを確かめたかったんだと思うと言います。

つまり、この男性はすでに私との分析において無意識の、彼の無意識のストーリーを意識化できるようになっていたのです。そのストーリーとして、彼が何かを望んでも相手は決してそのことを喜ばないし、むしろそういう彼をうとましく思って、彼に関わりたくなくなるんだという無意識のストーリーを持っているってことが意識化できるようになってきていたんです。そのために彼は「やっぱりこのようにしかならないということを確認したかったんだと思う」ということを言ったわけです。これは彼のお母さんとの関係にもともとあったものなんです。お母さんとの関係について彼が印象深く語ったのは、彼が幼かった頃に彼がお母さんに我がままを言ってお母さんに抱っこしてもらおうとお母さんを引っ張ったら、その時はずみでお母さんが倒れて身体を強く打って怪我をして、そして「あんたが我がままだからこんなになったんだ」とものすごく怒った。その強烈な記憶が彼にあるんですね。彼が欲することが、対象を苦しめ嫌がられるという物語を象徴的に表している記憶です。ここでは彼の持っているストーリーがこんなふうな、奥さんとのことで再現されて表出されたわけです。

これを聞いて私は次のような介入をしました。「そのことを奥さんに話した時に、あなたには希望もあったんでしょね」と、「厚いズボンというのはあなたの身を守るものとして、自分の身につけられるということをお前は望んでいたのでしょう」ということを言いました。実は、彼は私とのセッションを、週1回から週2回にしたがっているんです。その話はもう半年以上前からあるんですけど、実際にはそこに至ってないんです。それで、そのことに私は言及しました。「私との間でこの分析のセッションをもう1回増やすということで大事にされたいあなたがいるけれども、

わたしから受け入れてもらえない、大事にされないと感じられているのでしょうね」と、そういう解釈をしました。つまり奥さんとの体験として彼が語ったズボンの話というものが、そのまま私との気持ちを表している、いわば私に対する不安を奥さんの話として話したという理解がここにあるのです。

そして、その文脈が、彼が要求した時にその要求に対して非常に不快な顔を見せるというコンステレーションにつながり、奥さんとの話としてあるコンステレーションが、彼が要求すると奥さんはそれに対して困惑したり、拒絶したりするっていうストーリーを持っている、そうした文脈を語っているわけです。この二者関係の布置といいますか、コンステレーションが私との間でもそのまま起こっていること、理解があって、今お話したような解釈を私は彼にすることになりました。私に対してはもともと彼の拒絶する、あるいはどちらかといえばこう不快な気持ちを向ける、そういう母親対象が転移されているというその文脈がありました。その母親対象が私の方に転移されているんだけど、それはもちろん奥さんとの間でも起こることもありますし、しかしその事態を実際に取り上げるには私との間で取り上げることで一番インパクトがあるのです。だからそういう解釈をすることになるのです。

### 解釈するセラピストの視点

こうしてお話していると皆さんおわかりだと思んですけど、私の視点がどこにあるかっていうことなんです。目の前のクライアントにとって今の私はいったい誰なんだろうかっていう、そこに着目するのです。目の前のクライアントにとって私がセラピストであることは当たり前のことであるけど、そこに単純に収まらないのです。そうではなくて、目の前のクライアントにとって今の自分は内的対象としての誰なのかっていう、私はこの人にとって誰なのかっていうその視点をもって話を聴くということなんです。そしてさらに言えば、その目の前のクライアントにとって私は誰で、何をしている存在なのかっていうところでクライアントに耳を傾けるし、クライアントの様子をみていくのです。この時に私が、実際やっていることは、クライアントの話の聴くとともにクライアントのいわば非言語的のもの、(クライアントの様子とか口調とかあるいは言葉のリズムとかそういう非言語的のもの)も観察しているのですが、それと同時に逆転移も観察するのです。自分の中に起こってくる気持ちの動きという

のも観察することをやり続けているのです。

今お話しましたズボンのケースにおいてこのクライアントがまず、今朝は寒かったということを言ったんですけど、今朝は寒かったって言った時に、どこか私はこんなに朝早く寒い中を出て来なくてはいけないという、なにか責められているような感じが私の中に湧いたんですね。なんていうのか私は自分のオフィスで待っているわけですから基本的には動かないで済むわけです。でも彼は私のところに1時間くらいかけてやって来ないといけません。だから7時に来るためには5時半に起きないといけません。ちょっと責められている感覚、こちらとしては罪悪感を感じる感覚というのが逆転移としてあったものなんです。それからクリーニングに出したばかりのズボンの話が出てきて、それを言われた奥さんが非常に困った顔をしたので、彼がもうこれはダメだと思って、これに触れると苦しいからこの話は横に置こうとした、という話をしていたわけです。これを聴いた時に私の中では、奥さんは困った顔をしたけどハッキリ、はいちゃいけないとは言っていないんです。はいちゃいけないとは言っていないけど、彼の中では拒否されて、もうやっちゃいけないっていう感覚で体験しているのです。それを聴いている私には「この人はまたこういう反応を示している」という、ちょっとした苛立ちが私の中に湧き起こってきたのです。「それはちょっと違うだろう、そこまで言ってないじゃないか」っていうふうな気持ちが起こってきたのです。その気持ちの動きというのがいったい何なのかっていうことを考えた時に、なんかいつまで経ってもそここのところに彼が気づけない苛立ちといいますか、言いかえればちょっとも成長しない子どもへの腹立ちといった感覚を感じたんです。ですから、これはある意味、彼に苛立つ母親を今私が体験していることですから、私はある部分で、彼に苛立っている母親、彼がぐずぐずしていることに苛立っている母親という体験をしていることに気がついたんです。それが私たちの間で、実際の問題は何なのかということに目を向けるというところで、つまり今ここで私たちの中では何が問題でありうるかということに目を向けることにおいて、セッションの回数の問題と、彼がもう一回ほしいと思っているんだけど、私はそれに応じていないという状況がまさにその素材になっているんであろうことに気がつく必要があるんです。気がついてほしいのです。

こんなふうにして逆転移感覚を使いながらクライエ

ントとこちらの間で何が起きているのかっていうことをつかむ作業をしていくのが私たちの仕事です。私たちの実際のセッションの中で起きている、いったいどういう内的対象世界を生きているのか、無意識の物語を生きているのかということを理解する作業の一面にあたるものです。

### 共感と第三者の目

こうした形で理解を進めていくんですけど、この逆転移の認識をするという作業をするためには、ある種、私たちがクライアントに共感的には聴きながらも同時にどこか冷静に聴いている部分を持ってないといけません。あんまり共感的にのめりこんじゃうと、自分が見えなくなってしまいます。一方では共感的に聴きながらも、もう一方では第三者の視点のような客観的に捉える自己部分がないと自分の逆転移に気がつくことは難しいのです。しかし実際のセッションで起こる難しいことは、関係が濃厚になってきますと、転移からめとられてしまい客観的な視点がなかなか持たなくなってしまうことなのです。特にボーダーラインの人から激しい攻撃性を向けられたり、あるいは極めて心的に引きこもって反応がなくなったような人と対応しているような時にはすごく感情が刺激されるために、主観的な気持ちの動きは起ころうとしてもそれを客観的に捉える機能が落ちてしまうことが起きるのです。そうした時に自分自身が立ち直る方法が今お話したように、一体この目の前のクライアントにとってこの自分は誰なのかっていう視点に立ち返るっていうことが、客観的に捉えるということを私たちに手助けしてくれる方法なのです。こうした形でクライアント理解を深めていくのが、私たちがやっていく作業になるわけです。

### 治療構造の大切さ

ちょっと話がそれてしまうかもしれませんが、このような場合は、治療の構造をきちんと維持することが大事です。つまり外的な構造を一定にして、できるだけ変えないということが大事なんです。加えてセラピストのあり方を一定しておいて、それを基本的にあるセラピストの気持ちを同じような形で保つというのが大事なんです。それは最初にお話した時間変更のケースの件でおわかりのように、もしこのセラピストが年中時間変更していたらこういうインパクトは発生しません。セラピストがたびたび時間変更するような人であったら、こんな展開は起こらないんです。そ

れはそれ以前に構造が意味を持たなくなっているわけですから、こうした変化の影響は発生しないのです。むしろこれまできちんと面接していたにも関わらず、ここで変更が入ったから、インパクトが発生したんですね。きちんと枠を守ることが大事な意義がここにあるんです。あるいはセラピストの態度として基本的に同じような態度をとっているということがそれに何か変化が起きた時に、急に意味を持つわけなんです。

転移というのはどんな人間関係でも起きていることなんですけど、ふだんの人間関係で転移ってあんまり意識することもないし、わかりにくかったりするのには構造がはっきりしてないから、何かあたかも現実であるかのような感覚で体験してしまって、そこにファンタジーphantasyが入っているのが見えにくくなるんですね。でも枠がはっきりしていると、繰り返される中で揺れが起こったものへの反応としてすごく見えやすくなるということが、私たちが治療の構造をきちんと一定に保つことが大変大事だっていうことが、ここにあるわけなのです。

### 面接頻度の持つ意味

だからセラピーの中で転移を理解したり、取り扱ったりするためには、面接での構造は極めて大事なことになると思います。それと、ある程度セッションの頻度というのも大事になります。例えば月一回会っていて、転移を扱うっていうのは不可能に近いことです。月一回では現状報告をただ聴いて、ある種の指示をするかサポートをするかアドバイスをするかしかできないと思います。週に1回のセッションをやっている、話の展開というのは最初の10分、15分というのはいろいろな報告だったりするようなもので、その報告でも今お話したように文脈的に非常に意味のあるものが聞き取れる場合もありますけど、必ずしもそうとは限りません。月に1回では、その材料としてはいい材料というか、転移を理解する材料になるものがでてくることはなかなか少ないのです。2週に1回とか3週に1回とかになると、そういう日常的な報告がザッと語られて30分も40分も過ぎると、本当に内側からのものが出てくる時間がなくなってしまうことが少なからずあるのです。そういう意味で、できるだけセッションを週1回か2回持っているということは大事なことなのです。これがあって初めてしっかりした理解が成り立つのです。

## 転移の意味するものへの接近

さて次の文章は、解釈の組み立て方を書いていて、今みなさんに説明した部分を大まかに書いているものです。この対象関係論の方法において特徴的なものは、クライアントがいろいろ語る物語というのが、今ここでの面接の中の関係として、それがそのままここにあるという、そこに目を向けるということが大事な作業になっているということなんです。だから、お母さんの話をしたり、奥さんの話をしたりしているというのは、それはいわば面接場面での外での出来事ですね。extra transference、転移外の出来事なのです。だから、「奥さんとそんなふうだったんですね」っていう、そういう転移外の出来事として話題にするという方法もないわけではないし、そういう方法を使うということもありうることだと思うんですけど、しかし、より大事なことは、奥さんのこととして語られているそれが、あるいはお母さんのこととして語られていることが、“今ここで”の自分との関係にどう関連し影響しているかということなんです。この視点を持つことによって、まさに“今ここ”に生々しく動いている不安やその他の情緒が、セラピストとの間でどういう転移の性質なのかということをおぼろげに私たちは理解するし、そういう関わり作業をすることが意味を持つのです。

解釈をするというのは、決して気の利いたことを言えればいいということじゃないんです。無意識の理解をそのまま、わかったように伝えればいいというものじゃないんです。そのときに大事なことは、クライアントにとって今のセラピストは誰かということをおぼろげに認識して、その上で理解したことを伝えることが大事なわけです。例えばクライアントにとって、私がちゃんと世話していないお母さんというように理解されているなら、最初にお話ししました時間変更のケースでセラピストが解釈したのですけども、「今日、来週の時間変更を私がお伝えしましたね。そのことであなたは私が守っていない、放り出すように感じておられるようですね」と、こういう解釈をしたわけですけど、こういう解釈をしたとしても、そのクライアントにとって転移対象としてのセラピストが、もうすでに拒絶しているセラピストだと強力に感じられているなら、この言葉は拒絶の言葉として聞かれるんですね。この言葉は「あんたはそう思っているからダメなんだ」というような含みを持って、クライアントには聞かれることになるのです。しかし、クライアントがもっとセラピストに対してポジティブなニュアンスを持っていると

感じているなら、「今日、来週の時間変更を私がお伝えしましたね。あなたは私が守っていない、放り出すように感じておられるようですね」という解釈が、「ああ、私のつらいところを分かってくれているようだ」と、自分に共感してくれている解釈だと、クライアントが受け取る可能性があるのです。ですから、私たちがその場においてどういう転移対象であるかを認識したうえで、どういう理解のどの部分を伝えるかということを選ばないといけないところがあるのです。決して私たちの仕事は、教科書的にできないところなんです。なんていうのか、how toで、こう答えなさい、ああ答えなさい、っていうふうには決していかない部分なんです。やっぱりそこでの生きた関係があるわけですし、生きた関係がどういう性質のものかということに基づいて私たちが言わないと、相手に伝わらないのです。

皆さんの日常的な経験としてあると思うんですけど、普段から不快に思っている人物がいて、その人物が極めて正しい批判を私たちにしたとするじゃないですか。普段から非常に気に入らない人物が正しい批判をすると、その批判が正しいが故にますます腹が立ちますよね。「なんでこいつにこんなこと言われなきゃいけないんだ」っていうふうな、そんな感じになりますね。まったく受け入れたくなくなります。でもそうではなく、もともと分かってくれている人が批判をすると、それは痛いけれどもその人が言っているんだから、そのことは考える必要があるんじゃないかというそんな気持ちになります。だから、同じことを言われていても、どういう相手が言うかということで、全然違うわけです。

そして実際、私たちがセラピーをしていると、一つのセッションの時間においての私たちがどういう人物であるかっていうのは、ずっと一貫してそのセッションで同じ人物に見られているのではないですね。ひとつのセッションの中でも移り変わっていくんです。最初は、非常に拒絶的な存在だとクライアントがとらえていても、さっきのズボンの例で考えてみますと、男性のクライアントがセラピストを拒絶的な人物だと捉えていても、関係の進展においては、だんだん「ああ、自分のことを心配してくれている人だ」と変わっていく可能性があります。ですから、転移を理解することにおいては、それが静的に、スターティックに、「もうこの人との間では私はこの人を咎める母親なんだ」と決めてしまうのではなくて、むしろこの

人を咎める母親だという部分があったとしても、またちがうものも起こってくる可能性を常に念頭において、話を聞いていくということが必要になります。それが文脈を読み、そのコンテクストを読み、コンステレーション、布置を知るという作業でなされていくことです。その1セッションの中でのその人が持っている不安、恐れ、あるいは感情がどう動いていくかということやずっとモニターしていくことによって、はじめて転移の変化を読み取ることができるし、それが大事な作業になってくると思います。ですから、それに基づいて解釈はなされる必要があるのです。だから、こちらが理解したときにさっさとその理解を返すということとはしないわけです。私たちが「クライアントはこんな気持ちなんだ」ということを理解して、そしていつ、どう返すかっていうのは、やっぱり私たちが自分の中でいつも練り直さないといけない、作り直さないといけないものなんです。

### 解釈のタイミングとフォロー

私たちが気づいたものをあまり早く返してしまうと、それはセラピストのほうで自身の中で持ちこたえられなくて自分の中に早く戻しているんだとクライアントが思ってしまう「持ちこたえられない母親」を、セラピストが演じることになってしまいかねないのです。持ちこたえて、しばらくクライアントに苦痛なものを排泄させて、その上で返すタイミングをみるということが必要だということです。

そうしたタイミングを考える必要がありますし、どんなふうに私たちが発声するか、言葉を出して伝えるか、というところも非常に大事なところです。言葉にどれだけ情緒を含めて伝えるか。たくさん含めたほうがいい時もあるし、あんまり含めすぎないほうがいい時もある。これらのことも、解釈をするときに私たちが考えておくのはたいへん大事なことだと思います。

そして、さらに大事なことは、解釈をしたときにクライアントがどう反応するか、そこをきちんとフォローすることです。それはさっきお話しした時間変更のケースにおいて、セラピストが「今日、来週の時間変更を私がお伝えしましたね。そのことで、あなたは私が守っていない、放りだすように感じておられるんですね」という解釈をしたところ、クライアントは沈黙の後、「うーん」とちょっと首をかしげて、また沈黙して、「先生と母は違うところを今細かく探している」というような、「ここは30分早くなるだけで、なくな

るわけではない。でもそうすると年末はどうなんだ」と。年末だからセラピストは休みました、当然ながら正月があたりして。こういうことを連想していくようになっていくわけですね。ですから、彼女はセラピストの解釈に対して、「あなたにとって、私は悪いお母さんに感じられているんですね」という概念を伝えている解釈に対して、それを理解したが故にクライアントはその対象関係に自分がいることを自覚するのを怖く感じて、そこからなんとか離れようという動きを取って、違うところを探してみようとしたけれども、でも年末に先生は休んだから放り出したんだ、というふうな気持ちの部分で彼女は抱いているということが、語られているわけです。

流れをさらに示しますと、「そうすると年末はどうなんだ」と彼女が沈黙したところで、セラピストは「あなたのお母さんと私は違うというふうに、あなたはすっぱりと線を引こうとしておられるのでしょうか」というふうな、彼女のやっている心の作業を明確にする介入をするのです。そうするとこのクライアントは「そうかな」と言ってまた沈黙してしまいますけれども、少しづつそうに表情が動きます。それからしばらく沈黙した後、この女性は「母は妹を優先して私との約束をやめてしまうから、同じ親から生まれたのに妹が増いと逆恨みしてしまう。母に執着しているから」と、こういうことを言いました。ここでまたクライアントが、お母さんの話に戻って行きました。お母さんの話に戻っていったということは、セラピストがセラピストとの関係で解釈をしたんだけど、そこでの気持ちの揺れにこの人は苦しくて耐えがたいから、外の人間関係のほうに話をふってしまったのです。離れたのです、ここでの関係から。そこで、セラピストはこの流れに次のような解釈をします。「私に執着することを、とても恐れておられるようですね」という解釈をするのです。つまり、クライアントは母に執着しているというお母さんの話で外のことに持って行ったものを、セラピストとの関係にまた戻したわけです。今の気持ちとして、何を恐れているかということを知ったのです。「私に執着することを、とても怖れておられるようですね」という解釈をします。そうすると、クライアントは、少しボーっとした泣きそうな表情になって、「はい」という返事をします。ここにおいて、その情緒がセラピストとクライアントとの間に分かち合われたということが浮かび上がってきます。それから沈黙がまたあって、そのあとポツポツと彼女

が話始めるんですけども、「ここに執着していると言って、じゃあ私はここに何をしにきているのか」という発言が出てきます。しかし、もうそこで時間が来てしまったので、セラピストはこの材料には介入しないでここで終わりを告げることに実際にはなりました。

このようにして、このクライアント自身はここに執着している、つまりセラピストに執着しているということを彼女は認めましたし、何をしにきているのかと、つまり、一体自分に何が起きているのかというように、自分を見つめる心の動きになっていったわけです。時間があればそこがさらに掘り下げられるところなんですけど、この時は時間がここで来てしまったからここで取り上げないことになったという流れが起きました。このセッションではセラピストが時間の変更を伝えたわけですから、そこにおいて自分を守らない、自分を放り出すネガティブな母親が転移されていたんですけども、それに気がついたセラピストの介入によって、そういう放り出されることを恐れて一生懸命執着する彼女がいるという、彼女のありようについての理解は両者で分かち合われました。言いかえれば、そういう不安におののいているクライアントがいる、そして、それを理解する母親的な姿のセラピストがいくらかそこで分かち合われたところで、セッションが終わるということになっていったわけです。

ひとつのセッションにおいても転移像というのが動くのです。もちろん、そこにセラピストがどう理解してどう介入するか、どう感知してどう介入するかという、それが大きく作用するというのもみなさんが聞いていて、おわかりいただけたんじゃないかと思います。

### 解釈の受け止め方、伝え方

私たちが解釈をつくるときには、そこに書いています、こういう要素を頭において、解釈をセラピストの中で構成して、さらにクライアントが理解できる表現でタイミングを見て伝えるということを実行する必要があります。ここに6つの要素を描いていますが、これを全部一度に伝えるという意味ではありません。そのクライアントの状況に応じていくつかを伝えることになります。まあ、一番上等であれば、6つ全部伝えることにはなりますが、たいていは、このいくつかの部分に基づいた理解で伝えるということが実際のセッションではやっていくことになるんだと思います。

私たちが大変気の利いたセラピストとして気の利いた介入を短い言葉でできれば一番いいのかもしれない

んが、なかなかそうはいかないですね、実際には。それと、短い言葉で言ってしまうと、それを受け取る側の受け取り方が、幅が非常に広がってきますから、むしろ誤解を招くおそれというのもあるのです。ですから、丁寧に「あなた」「私」という主客の言葉をキッチンと入れて解釈をするときと、ただ「放り出されるように感じるんですね」という部分だけで解釈するときとか、その辺も私たちが十分に吟味する必要があるところなんです。みなさん御存じのように、日本語の普通の会話ってというのは、「あなた」とか「私」とかいう言葉は、あんまり入れないですよ。「ごはん食べた？」って親子なんかで話すときに、「食べたの？」って言ったら「あなたは晩御飯を食べましたか」と本当は聞いています。でも日本語では「食べたの？」っていう、それだけしか言わない。そういうのが日本語の普通の会話だったりするんです。しかし、こういう面接場面における私たちのやりとりというのは、正確な理解を分かち合おうとしているのですから、普通の日本語の会話とは違うのだということも、また意識しているのが大事だと思います。ですから、誤解がないようにするためには、「あなたは私に」とか「あなたが私に」とか、そういう主客をきちんと言うのが介入としては大事になる、それを認識していることが、私たちが解釈をするときに役に立つではないかと思います。

大体お伝えしたいことはお話しましたように思います。もう一つ大事なことは転移が起きているときに、その転移を打ち消すようなことをしないことです。例えば、「先生と話していると、先生がお母さんのように感じられる」と言うクライアントがいたとすると、それはある種の母親を転移していることなんですけど、そういうときにセラピストのほうで「私はあなたのお母さんじゃないよ」と言ってしまうと、せっかく起きているものが帳消しにしてしまうわけです。これはいささかまずいですね。そのクライアントの空想、クライアントの持っている内的世界をこちらに投影するのを、受け取らないといけません。

だけど、それが極めて難しい場面というの、実際の臨床の中では起こってくるものなんです。エディプス的な状況というのは、クライアントがセラピストとの間でよく体験することですから。例えば、男性のクライアントがいて、女性のセラピストが面接しているとしますと、それに、男性の主治医がいたりすると、クライアントは女性のセラピストと男性の主治医というのをひとつの両親カップルとしてみてしまやすい

ですから、あたかも2人が両親のようにつながりあって、そういう性的な関係があったりするような、そういうファンタジーを持って、セラピストに向けてきたりすることがあるものです。それで、ボーダーラインがかかった男性であったなら、その女性のセラピストに対して愛着を抱いているんだけど、女性のセラピストはエディプス的な両親カップルとして収まって満足しているというふう感じて、憎しみを抱きますから、女性のセラピストに「あなたはここの医者とできているんだろう」とか、そういうことを言ったりするのです。そうすると、女性の方は濡れ衣を着せられているという感じになるから、「そんなことはありません」と言ってしまうたり、我慢できなくなってしまうこととなります。でもそれをいうと、せっかく持ち込んで来ているもの、この場合はエディプス状況、を潰してしまうみたいになってしまいます。それはクライアントのファンタジーですから、ファンタジーとして、無意識の空想を語っている、つまりその両親につ

いての無意識の関係が転移されて実演されているんだという、そういう認識を忘れないで関わるのが大事になってくることです。だからその転移を治療に使うためには、私たちが転移の中にきちんと留まっていないといけない。この大切さを忘れないことは重要ではないかと思います。

私がお伝えしたかったのは、どう転移を感知して、どう理解するかということです。そこところが、一番お伝えしたかったことであって、転移の理論とか逆転移の理論とかそんなものはどうでもいい。本読めば分かりますし、そういうものはどうでもいいものです。それよりも、実際のセッションにおいて、今このクライアントにとって私は誰なのか、私は何をしている誰なのかっていう、その視点を持って関わられるということが、そのクライアントを転移の文脈で理解するのに大変有用であるとのことを頭に留めておいて頂ければと思います。ご静聴、どうもありがとうございました。